

『まちの景観にもっと興味を』

近畿大学九州工学部 井波 益雄 学部長

井波益雄／いば ますお

1934年7月10日生 1969年より近畿大学で教鞭をとる。

1992年10月より現職 好きなもの：闘牛

Q：どうしてこの道へ？

A:建築デザインの仕事がしたかったけれども、不況だった当時（昭和30年代）の就職状況では、大学に残る以外になかった。

Q:筑豊を建築デザインから見るとどうですか？

A:筑ゼミもV期を修了しているのに、建築がテーマにならなかったのが不思議でならない。ひとの心も当然大切ですが、はっきり言ってまちづくりの8割は建物づくりだと思います。まちの景観についても、もっと興味を持って、発言していいのではないのでしょうか。

Q:では、街づくりのための建築という点で筑豊を見ると？

A:どなたが設計したかは知りませんが、飯塚の市役所も道路からワンクッションおいて建物が建てられています。あの空間というのは最初広場として設計されていたのではないか。それが今では“げた箱”（駐車場…編者注）になっていますね。

遠賀川の土手もそうです。街のそばという非常にいい位置にあるスペースが“げた箱”になっているのはもったいないですよ。もっと良い使い方があると思います。

ほんとうならそういったことをあなた達に考えてもらいたい。

～インタビューを終えて～

先生はひとの心の反映として建築を捉え、街の建築物や都市計画に対する私たちの興味が、そのまま街づくりへの意欲につながると考えておられるようだ。また、失われつつあるふれあいの場“ひろば”の存在というこれからの街づくりについての重要なキーワードを伺うことができた。

わずか1時間余のお付き合いではあったが、あまり面識のない取材班に対し、建築デザインの話の日欧の文化の違いや身近な具体例を交えてわかりやすく説明され、時には熱っぽく語られる先生の姿に、大学の教授という肩書を超える何かを感じた。

会見データ：5月22日（土）近畿大学九州工学部長室にて 編集部：立林・二宮

『筑豊≡遠賀川』

遠賀川の水を守る会事務局長 松隈 一輝 氏

松隈一輝／まつくま かずてる

1950年11月30日 嘉穂郡碓井町に出生 慶応大学文学部通信教育課程卒業

1971年7月 日本電子電話公社(現NTT)入社。現在に至る。

筑豊の環境問題の新聞記事で時折その名を目にする“遠賀川の水を守る会”。来年発足10周年を迎える会の事務局長である松隈氏に今回は迫ってみた。

Q：どうしてこの道に

A：入社後最初の任地の諫早市で、当時わき起こった諫早湾の干潟を残そうという運動に出会ったのがきっかけ。

Q：“遠賀川の水を守る会”について短い紹介を

A：民間の立場から遠賀川流域の水環境の浄化に取り組んでいる団体

Q：会の誕生の経緯を

A：見た目に川が汚れていた石炭時代に対し、炭鉱が無くなってからの方が、水が汚れているという事実に危機感を持ったのがきっかけ。そこで、1984年、城雄次・広島大学助教授(当時)の講演会が開催され、その主催者が中心となって会が発足した。

Q：具体的な活動内容を

A：石鹸の普及と、それにまつわる廃食油の回収等。合併浄化槽の普及推進。ゴミ問題・ゴルフ場問題。行政への陳情、請願…等々。

Q：行政への陳情・請願とあるが、行政をどうとらえているのか？

A：行政は敵対する相手ではなく、共に歩んでいくべき存在と考えている。そのための手段の一つとして陳情・請願を行っている。

Q：あなたにとって街づくりとは

A：社会的に発言できる市民をどれだけ増やすかということだ。

Q：筑豊に対する思いを

A：地球という生命体の血液は水であり、流域は血管である。流域が健康でなければ地球全体も健康であり得ない。元来筑豊は、中間遠賀地区をも含んだ遠賀川流域のことだと思う。それが行政区分や慣習によって狭く区切られていることが、私たちの活動の足枷になっている。その枠を克服するために“遠賀川水系座談会”等の新たな取り組みをはじめている。

～インタビューを終えて～

温和な話好きなひとではあるが、時折メガネの奥から見せる鋭い眼差しと、行動に裏付けられた重みのある言葉が印象きだった。

会見データ：6月13日(日)飯塚市新立岩の松隈氏宅にて 編集部：立林・二宮

『情報を生かしたまちづくり』

松下電器産業株式会社 九州地区研究所推進室 寺西 昭男 室長

寺西昭男／てらにし あきお

1942年1月5日 神戸に生まれ、下関に育つ

九州工業大学電気工学科卒業後、東大の大学院へ 1967年松下電器産業入社。

平成4年、九州地区研究所設立と共に、推進室長として、筑豊へ。

家電のトップメーカー、松下電器産業の研究室が飯塚にできたということで、どんな人がどんな研究を行い、地域とどうかかわって行こうとしているのか、研究所の責任者である寺西室長にお話を伺ってみた。

Q：研究所の研究内容は？

A：これからは、情報が商品として捉えられる時代になると考えている。そのために、情報通信分野の核になるシステムを研究している。具体的には、無線による通信システム、教育の支援システム、ファクトリーオートメーションシステムの3つに大別される。

Q：なぜ飯塚に研究所を？

A：まず人材。次に九工大情報工学部の存在。そして飯塚市の熱心な要請。この3つが大きな理由だ。

Q：筑豊へ来る前のイメージと、来てからの感想を。

A：『青春の門』など、小説や写真集から受ける産炭地の印象が強いが、聞くと見るでは違うというのが実感。都市の規模に対する自然環境がいい。それに飲食店等が非常に多く、仕事を離れた所で付き合いを作れる雰囲気がある。“歴史は夜つくられる”という言葉もあるくらいだから。その辺は筑波あたりとずいぶん性格を異にしていると思

う。

Q：この筑豊とはどのような付き合いをしていくのか？

A：我々はあくまでも企業であるため採算や企業秘密という制約がかかってくるが、個人的には高度に情報化したまちづくり“インテリジェンス・タウン構想”を考えている。ただ、どこから取りかかれればよいのか解らない。我々に何が求められているのか、それを知りたい。まずは地元の人たちとの対話から。

～インタビューを終えて～

ご厚意に甘えてしまい、1時間の予定を大きく超えて2時間近くもお邪魔してしまった。取材前には企業人、そして研究者という真面目で固いイメージを抱いていたが、そういったものを感じさせないお心づかいの細やかさと懐の広さに感激した。

会見データ：7月29日（木）飯塚市川津の松下研究所にて 編集部：立林・二宮

『いきいき河川はまちの輝き』

建設省九州地方建設局 遠賀川工事事務所 久保田 勝 所長

久保田勝／くぼた まさる

1953年12月22日 大阪府藤井寺市に生まれる。

京都大学土木工学科卒業後、大学院へ 1978年建設省に入省。

和歌山を皮切りに東京と九州を交互に赴任し、現在遠賀川工事事務所長に

近年“遠賀川炎のまつり”や“I LOVE 遠賀川”等遠賀川にまつわるイベントが数多く開かれるようになり、市民と河川との関わりが注目されている。この河川の管理者である遠賀川工事事務所の久保田所長にお話を伺ってみた。

Q：事務所の事業内容は？

A：九州に20水系ある一級河川の一つである遠賀川流域総延長133.8kmの維持管理、河川敷の占用許可、水利権の調整等。

Q：これまで色々な川を見てこられたと思うが、遠賀川の印象はどうか？

A：まず言えるのは、水の利用率が非常に高いことである。一つの河川に約70万人の人が依存しており、その利用率の高さは日本で1・2の争うのではないだろうか。そして堤防などの整備率が高いことなど。

Q：最近この川を会場にしたイベントが数多く開かれ河川との関わりが注目されるようだが、どうお考えか？

A：川と市民との関わりが深くなるのは非常に喜ばしい。河川敷利用については自由使用を原則にしており、許可申請があれば誰でも利用できるようになっている。ただ残念なのは、日常生活と川が密接につながっていることに気付いていない事だ。

Q：では、流域の市民に求めるものは？

A：一つの川をみんなで利用しているのだから、みんなで川を大事にするということ。つまり、「流域の視点」をもって欲しい。

Q：川を大事にするという点で、河川管理の自然環境への配慮はどうお考えか？

A：これまでは治水を重視した土木工事一辺倒であったが、環境保護等への関心の高まりから、建設省では「多自然型川づくり」実施要項を施行し、河川修理等において環境や景観への配慮を行っている。この遠賀川でも、老朽化した井堰や水門の改修が主になってくるので、魚道の設置や工事を行いたい。また施工中の直方リバーサイド計画のように、流域市町村の街づくりに応じて、河川の環境整備を行いたい。

会見データ：8月30日（月）直方市の遠賀川工事事務所にて 編集部：立林・二宮

『筑豊こそ世界の先進地に』

福岡県立大学 安藤 延夫 学長

安藤延夫／あんど う のぶお

1929年4月29日 大分県に生まれる。

1963年九州大学大学院教育学研究科博士課程を終了後九州大学で教鞭を振る。

1990年福岡県社会保育短期大学長に就任。1992年同短期大学が4年制に移行し、福岡県立大学が開学され、初代学長に就任。現在に至る。

昨年の開学以来「田川の大学」として熱い期待を浴びている福岡県立大学。その学長として大忙しの安藤先生にお時間を作って頂き、「地域と大学」の関わりを伺ってみた。

Q：開学以来2年目に入ったが、田川の街との関係はどうか？

A：大学設立にも天の時・地の利・人の和がある。大学は企業を誘致するようにはいかない。先に大学がおかれ、それから街ができる場合と、既存の街に大学が来る場合との2つがある。田川は後者だ。

Q：天の時とは？

A：21世紀を控え、環境破壊や高齢化の進行に対する、社会福祉(高度福祉社会)への希求が高まっている。今が歴史のターニングポイントだ。

Q：地の利とは？

A：交通や居住等のハード面においては確かに難があるが、環境破壊・高齢化・身障者の社会参加・失業対策など今の日本が抱える次世代への課題がこの田川にはたくさんある。つまり研究のフィールドとして非常に恵まれている。ここで学んだ学生が、社会の第一線で活躍し、日本が抱える次世代への課題が打開されていけば、筑豊は日本のみならず、世界の先進地になることがで

きる。

Q：人の和とは？

A：まず学生に求められる大学になることが第一。「社会福祉」の最高学府として学生にどれだけのことを伝えられるかが問われる。また市民側も学生が来る街・来たくなる街になるように努力をお願いしたい。これが揃った時、田川の街と県立大のパートナーシップが確立したと言えるのではないだろうか？

～インタビューを終えて～

安藤先生のお話を伺い、筑豊のマイナス点が地域の未来につながると知った。「鍵」は握っている。使い方が問われているのだ。

会見データ：9月30日(木) 田川市の福岡県立大学学長室にて 編集部：立林・本田

『筑豊よ、美学に目覚めよ!』

近畿大学九州工学部 曾根 靖史 教授

曾根靖史/そね やすし

1932年5月1日 東京都に生まれる。

1955年東京芸術大学美術学工芸科図案部卒業。

卒業と同時に学友たちと「GK デザイン機構」設立。

1987年近畿大学九州工学部産業デザイン学科に就任。現在に至る。

お江戸日本橋生まれ、チャキチャキの江戸っ子・曾根先生は現在近大で筑豊ゼミ担当委員長。また、先日行われた「I Love 遠賀川」の仕掛け人でもある。

公私とも大忙しの先生に「I Love 遠賀川」やゼミなどを含め筑豊の街づくりについてお聞きした。

Q: 6年目を迎えた「I Love 遠賀川」はいかが?

A: 小さな輪が起こす波状効果が確実に表れている。市民の意識も向上し川は綺麗になったし、運営体制も確立された。あせらず、気張らず、それでいて常に新しいファクターを導入しているのが長続きのコツ。

Q: 最近の筑豊ゼミは?

A: ここ1・2年性格が変わった。講師に喋らせるだけでは普通のゼミやカルチャースクールと一緒に。主体性・アイデアと行動力・創造性が筑豊ゼミの持ち味であり主旨ではないか。

Q: 地域づくりセンターは?

A: 構想と現状が一致していない。センター会員・ゼミ生・大学を巻き込んでコンセンサスを築き直す必要を感じる。

Q: 筑豊の街づくりについては?

A: 1人ひとりが“美”について感じる社会になって欲しい。ここで言う美とは感覚的

な美しさのみならず立ち居振る舞いなどの生活習慣、汚職や暴力団などに対する政治・社会感覚、人とのふれあい方など風土も含まれる。筑豊の人々はこれに関して良く言えばおおらか、悪く言えば無頓着で乱暴。耐え得る強い神経を持ってない者は他所の地に出て行ってしまふ。身綺麗にする、他人を思いやる、悪弊に目をつぶらない…そんな生活における美意識を身に付けてほしい。恋人に対するように筑豊に対してほしい。故郷を愛してほしい。

～インタビューを終えて～

学生さんへの卒業制作指導の合間を縫ってのインタビュー。「大変ですね」と言うと、「感性は言葉じゃ通じないからスパルタ教育だよ」と笑っておられた。

会見データ: 11月1日(木) 近畿大学曾根研究室にて 編集部: 三村

『まちづくりは総合芸術』

福岡県企画振興部地域政策課 伊藤 信勝 課長補佐

伊藤信勝/いとう のぶかつ

1945年9月22日、田川市に生まれる。

貿易マンを夢見て北九州大学卒業後商社へ

1970年福岡県職員となる。田川福祉事務所・同和対策局・地方課を歴任。その間、自治大学卒業。1987年より3年間矢部村助役を務め、現在福岡県企画振興部地域政策課課長補佐兼(財)秘境柚の里相談役。

福岡県職員としての仕事はもとより、林業の村矢部村の助役として、“柚(=林業)”をテーマに地域づくりをされた、伊藤氏に地域づくりのポイントを伺ってみた。

Q: 以前「“住産学協同の街づくりではなく、“住産学官”による共同を」と言われていたが、もう少し詳しい説明を。

A: 様々な社会機構の枠を超えた地域づくりは重要なことだが、ここで行政を無視していたのでは、小さな企画を成功させることはできても、地域全体を変革させていくことは困難だと思う。また、“住産学官”といっても、それぞれの立場に拘泥するのではなく、住民一人一人が、地域に対する意識に目覚め、同じ目標に向かって行動することが大切だ。街づくりの主役は住民なのだから。

Q: つまり、立場を超えた地域づくりへの参加が必要だということか?

A: 地域づくりというのは言ってみれば、企業経営と同じで、資本の大小といったことよりは、構成員の意識が問われる。シラケた意識なんかでは、組織も地域も伸びて行かない。

Q: 筑豊についてどういう想いを持っているか?

A: 非常に大好きだ。語弊があるかもしれないが、大好きだからここから逃げ出さずに生活している。

Q: 地域に対する愛情と情熱が基本になる?

A: そうだ。住民の一人一人がその愛情を持って、それぞれの所属する組織や社会の中で力を尽くしていくことが大事だ。別な言い方をすれば、自分を大切に持つ心を持って人にも接し地域の中にも参加していくことだと思う。そうして地域が持つポテンシャルを高めていくことだね。街づくりは住民による総合芸術だ。初めに言った、“住産学官による共同”というのも、そこに帰結するわけだ。

～インタビューを終えて～

12月議会や予算編成等多忙中、お時間を頂いてのインタビューだった。

会見データ: 12月1日(水) 電話にてインタビュー。 編集部: 立林

『学園都市はまだまだ広がる』

筑豊地域づくりセンター名誉理事長 本郷 英士 先生

本郷英士／ほんごう えいし

1921年11月23日、大分県久住町に生まれる。

1947年広島文理科大学数学科卒業。広島大学・九州工業大学を経て、85年近畿大学九州工学部へ。86年学部長に就任。93年退職。読売理工学院理事、読売九州・福岡理工専門学校校長に就任、現在に至る。

91年「筑豊地域づくりセンター」発足にともない理事長、93年より名誉理事長。

近大産業デザイン学科・経営工学科・大学院、九工大情報工学部、筑豊ゼミ・センターの生みの親。研究学園都市の自家本元に地域と大学の極意を伺った。

Q：どうして数学の道に？

A：出会いは西田哲学。微積分の考察に興味を覚えたのをきっかけにのめり込んでしまった。数学は哲学の理性的表現。あえて言えば、全ての学問に通じる。

Q：近大の新学科増設にも役立ったとか？

A：工学の出身じゃないので公平な目で見る事ができた。工学部を従来より広く、「工学を中心とした幅広い学問領域を扱う学部」と考え大学作りを進める事ができた。

Q：他に心がけたことは？

A：地域と時代に対する大学の位置づけ。
80年代に九工大の創設方針を提案した時はシリコンアイランドと呼ばれた九州の地域性と情報化社会の幕開けという時代を意識した。近大で学科を増設したときも、「何かやろうとする意欲と企画力。工学に対する、より広い領域での期待」という地域のニーズと、「ポストエレクトロニクス」という少し先の時代を読んだ。大げさに言えば、

この時点から地域とともに生きるなにかの決意をした。

Q：筑豊の研究学園都市の現状についていかに？

A：より広くネットワークを築いてほしい。大学は国公立の垣根を超え、また地域へも開放を。地域についてもそれは言える。東京一極集中を批判する福岡が福岡一極集中を何も言わない。筑豊における飯塚がそれであってはならない。学園都市はもっと広がる。

～インタビューを終えて～

「苦労談は？」の問いに「『全ての進歩は分らず屋のおかげ』だよ」とお答えなされた先生。今更ながら「親の恩」が身に沁みだ。

会見データ：12月17日（金）飯塚市大浦荘談話室にて。 編集部：三村

『仕事も音楽も もっと“飛ぶぞう”!』

THE FLYING ELEPHANTS 安部 米央 氏

安部米央/あべ よねお

1950年1月7日、田川市に生まれる。

1971年日本デザイナー学院卒業。西日本広告社等を経て「デザインルームアベ」を開業、現在に至る。70年に友人達と「THE FLYING ELEPHANTS」を結成。93年東芝 EMI からメジャーデビュー。92年にはアメリカ・カーネギーホールでコンサートを開くなど内外にて活動中

今回は“筑豊のビートルズ”として注目されているフライングエレファントの安部さんに、ミュージシャンであると同時にグラフィックデザイナーとして地元で働いておられる普通の人としての側面からインタビューしてみた。

Q: 筑豊と安部さんのかかわりは?

A: よく聞かれることだがたまたまここで生まれて、ここで育ったという感じ。ただ長年住めが良い所だ。

Q: 筑豊がどんな風が変わったら良いと思うか?

A: 今のままで良いと思う。鳴かず飛ばずというかぬるま湯の状態だね。東京なんかは街自体が機能性の高いシステムみたいになっていて、新しいものを創ったり考えたりするには難しい場所だ。仕事から離れて腰を据えてものを考える場所じゃない。逆に筑豊は故郷だということもあるが、そういった場所として適していると思う。

Q: 確かに松下の研究室長も同様の指摘をしていましたよ。では、ここにレコーディングスタジオなんかがあればいいですね?

A: そうだね。そうすればライブののりで音楽を創っていけるね。

Q: 仕事を持ちながら音楽をやるのは大変ではないですか?

A: 元々プロになるのは眼中にあった。ただ生活を考えれば両立させるのはやむを得ない。ただ、音楽を続けたいというハングリ-さが大事ですよ。自分の想いを実現するためには。

Q: 実際はどうですか?

A: メンバーの中にも考え方の違いがあってお互いに何かを犠牲にしている。でも仲間がいたからこそここまでやれた。自分の思いだけでは途中で挫けたらろう。

Q: では最後に、音楽とデザインとどちらが本業ですか?

A: どちらも捨てがたい。五分五分といった所かな。

会見データ: 1月29日(土) 飯塚市内の喫茶店にて 編集部: 立林・二宮

『裸の王様ではいけませんよ』

九州工業大学情報工学部 山川 烈 学部長

山川烈／やまかわ たけし

1946年1月20日、中国瀋陽市に生まれ、生後3カ月で熊本に引き揚げ。

九州工業大学卒業後、東北大学修士・博士課程を経て、79年熊本大学に。助教授を経て、89年九州工業大学情報工学部教授に。

93年4月、同学部長に就任現在に至る。

ファジイ理論と言えば家電にまで応用され、慣用句になるほど馴染んだ言葉だが、この研究の中核が筑豊にあることを知らな

Q：大学の近くにお住まいだが、住んで感じる筑豊の印象は？

A：良きに悪しきに付け目立つ所だ。筑豊に移って5年になるが、今でも思うのはギャップが激しいというかアンバランスだね。例えばお金の有る無し、マナーの良し悪し etc. 人に限らずいろんな面で両極端。それから講演依頼の際に思うのだが、「〇〇を考える会」というのが多い。考えるのは良いことだが、それにとどまらず実行する会が欲しいね。

Q：確かに多い。筑豊人はお祭り好きで、“熱しやすく冷めやすい”

A：この辺で言う“川筋気質”だね。熊本にも“肥後モッコス”というのがあり気質は似ている。ただ、時代の移り変わりというものを考えてないと、本人が意気がってるだけで周りにとってはいい迷惑というのがよくある。

Q：耳が痛い。

A：ここはもっと伸びて行く地域だから、やはり活動の継続が必要。“継続は力なり”と

い人はまだ多い。ファジイ理論野世界的権威・山川先生に筑豊について語って頂いた。

いうが、一度きりのお祭り騒ぎばかりしていたのではその内誰にも相手にされなくなる。

Q：その通り。

A：「俺が、私が」と言っているうちにいつの間にか“裸の王様”になって、子供に「裸だ」と言われて初めて自分の姿に気がつく…なんてのは情けないですからね。

～インタビューを終えて～

厳しくも貴重な意見を戴きやりがいのあるインタビューだった。数日後に近くの小学校を招待すること。大学がより広く地域に根ざすよう心を砕いておられた。

会見データ：3月3日（木）九工大情報工学部・学部長室にて 編集部：立林

『素顔で暮らせる庶民の街に』

嘉穂劇場・劇場主 伊藤 英子さん

伊藤英子／いとう えいこ

1919年2月18日、飯塚市本町生れ。

1935年嘉穂高等女学校(現・嘉穂東高校)を卒業。46年、父・伊藤隆氏の死去に伴って姉と共同で嘉穂劇場を経営。以降半世紀にわたり、幾多の危機を超えて、現在に至る。

筑豊の、いや北九州の大衆演劇の灯を守り続ける嘉穂劇場。父・姉の死後、女手一つで劇場経営を支えてきた伊藤さんに、筑豊に対する思いを語って戴いた。

Q：70年以上ここで暮らしてこられたが、筑豊はどういう地域だと思うか？

A：根強い地域だと思う。炭鉱という主要な産業がなくなっても、郷土愛の強いたくさんの人たちの力で持っている所だ。役者さん達からも、想像以上に明るくて賑やかなのに驚いたという言葉をよく聞く。

Q：筑豊がどう変わったら良いと思うか？

A：今の延長線上にある発展ではなく、大衆・庶民の町、誰でも素顔で歩ける楽しい街になって欲しい。

Q：それは福岡や北九州とは違う街ということか？

A：そう。永久にあそこの真似はできない。田舎のものは田舎のものなりであれば良いと思う。今のようない時代にはかえってその方が住みやすいのではないだろうか。

Q：先日、「第1回福岡県文化功労賞」を授賞されたが、ご感想は？

A：県の功労賞ということで大変びっくりし

ている。皆さんのおかげだと思う。でも、福岡程の大きな県で、第1回というのが不思議。

Q：ようやく地元で根差した文化に目が向いてきたということだろうか？

A：そうかも知れない。これを機会に地域の文化がもっと盛んになれば良いですね。

～インタビューを終えて～

肉親の不幸や、筑豊の経済基盤の崩壊、大衆文化の激変などのなかで嘉穂劇場を『心棒ひとすじ』に守り続けた伊藤さん。しかし穏やかな笑顔には、長年の苦労は感じられない。歳月を経てなお健在である嘉穂劇場にじっと座っていると、劇場を守るために注がれてきた伊藤さんのエネルギーをひしひしと感じた。

会見データ：4月8日(金) 飯塚市嘉穂劇場にて 編集部：中島・立林

『共和国は年中無休!』

フルーツ共和国・九州リンゴ村花まつり副実行委員長 石本 守圀 氏

石本守圀/いしもと もりくに

1934年9月3日、嘉穂郡足白村(現嘉穂町)宮小路生れ。

大隈中学校を卒業後、家業の農家を継ぐ。75年からリンゴの栽培を開始し、現在に至る。70年周辺農家と共に嘉穂町農協から独立し、宮小路果樹組合を設立。この組合がフルーツ共和国の中核となる。

筑豊の春のイベントとして定着した嘉穂町フルーツ共和国リンゴ村花まつりも今年で第10回を迎えた。花まつりの副実行委員長である石本さんに果樹栽培を通じた街づくりのお話を伺った。

Q: この果樹栽培が始まったのはいつ頃からか?

A: ナシの栽培は130年ほど前から行われている。すでに3代目の果樹農家もある。リンゴの栽培は75年に宮小路の目玉として、観光を兼ねて始めた。九州ではおそらく最初だろう。

Q: 寒冷地が本場のリンゴの栽培・流通には苦勞が絶えなかったのでは?

A: 栽培は確かに難しかった。しかし組合内がよくまとまっていたし、もともとここが果樹栽培に適していたこともあってここまで来れた。また市場を経由せずに直接販売(地方発送)にしたことで、お客さんとの関わりが強まった。

Q: それがリンゴ村花まつりのきっかけになったということか?

A: そうだ。果実=秋の収穫の時だけでなく、春の花や夏野木陰などの年間を通じてここを楽しんでもらいたかった。春の花まつりが有名だが、夏にも園内や自宅を開放して

パーティーなどに使ってもらっている。現在1シーズンの来訪者は20万人を超えているのではないだろうか。

Q: フルーツ共和国が10年続いた原動力は?

A: お客さんの期待に応えたいという気持ちが一番。そのためには続けなければならぬ。お客さんに喜んでもらえるのが一番だからね。

～インタビューを終えて～

130年にわたって連綿と続く栽培の歴史と、ひたむきな姿勢。ナシやリンゴを作るエネルギーがそのまま地域をつくる原動力となっている。

会見データ: 5月7日(土) 嘉穂町宮小路・石本氏宅にて 編集部: 立林

『チームワーク・チームプレイで 果敢にチャレンジ!』

直方郵便局 吉原 益美 局長

吉原益美／よしはら ますみ

1938年5月26日、鹿児島県鹿屋市生まれ。9人兄弟の8番目。3才で父親と死別。57年県立鹿屋高校卒業。家業の農園の事業基盤を固めた後、61年郵政省鹿屋郵便局に入局。86年宮崎県北浦郵便局長就任。以後各地の局長を歴任し92年7月直方局長に就任、現在に至る。

道路情報提供システム・直方産ゆうパック・局フロアの積極的活用・各種イベントへの参加など、直方局長の“元気印”は頼もしい限り。その秘訣を「張本人」吉原局長に伺った。

Q：直方郵便局の活躍を随所で耳にするが？

A：郵政の最大の財産は、何といたっても住民の皆様のご信頼。郵便・貯金・保険、どれを取っても局ならびに局員が生き活きしていないとお客様の期待に添えない。緊密な連携でチームプレイを展開するのはもちろん、各個人においても常に前向きに熱意とチャレンジ精神で事に当たるようハッパをかけている。

Q：道路情報提供システム(郵便局員が勤務中等に見つけた道路の破損や標識の損傷等の道路情報をまとめて市担当部署に連絡)など地域への貢献も盛んだが？

A：外務局員は郵便・貯金業務等で毎日地域を走り回っている。その情報量はおそらく随一。これが市民生活に役立つなら喜んで提供する。「ゆうパック」にしても、郵政ネットワークが地域特産品の掘り起こしにつながるならどんどん利用してほしい。地域の活性化なくして郵政の本業は成り立たない。局が動くことで地域に貢献できるなら

積極的に活動してゆきたい。

Q：筑豊に対する感想は？

A：我々転勤族にとって、赴任地との関わりは一期一会。だからこそ地域との出会いを大切にしたい。筑豊は気性がさわやかで排他的でなく住みよい所だ。一方いろいろな地域の問題を抱えていることも理解している。しかし放置していても問題は解決しない。失敗を恐れず常に“攻め”の姿勢を持ち続けてほしい。

～インタビューを終えて～

「不可能と諦めるのではなく、どうすれば可能かを探る熱意が大切」と語る吉原局長。幼年期より波乱万丈の人生を歩いてきた、一級品の“元気印”だ。

会見データ：6月1日(水)直方郵便局・局長室にて 編集部：中村・三村

『地域と大学の新しい関わりを！』

福岡県立大学と共に歩む会会長 秋吉 一明 氏

秋吉一明／あきよし かずあき

1947年9月16日、大分県別府市に生まれる。

久留米大学医学部を卒業後、医師免許取得。77年社会保険田川病院に着任。

89年5月、田川市春日町に秋吉整形外科を開業、現在に至る。

93年9月、「福岡県立大学と共に歩む会」発足時より会長を務める。

6月13日に「共に歩む会」の総会が終わったばかり。昨年9月の発足以来、「とにかく手探りでやってきた」秋吉先生にはホッと一息というところ。田川との関わりや、今後の「歩む会」の抱負など聞いてみた。

Q：どうして田川に？

A：17年前、久留米大学病院から田川病院に派遣されたのが始まり。最初は特に「田川」という意識はなかったが、9年間も勤務しているうちに知り合いも増え、また「このままでは田川はどうなるのか」と心配するほど関心も湧いた。結局田川に染まってしまっただけで開業することになった。

Q：「共に歩む会」の会長になったのは？

A：キッカケは実は野球。地域に明るい話題を提供するため「41歳以上の甲子園・国体壮年部に出場できるチームを！」と『田川クラブ』を結成したのが地域との付き合い始め。チームの活動が活発になるとあちこちで知り合いが増え、お声がかかった。人前でしゃべるのは本来苦手だが、敢て挑戦している。

Q：県立大との関係は？

A：「共に歩む会」は県立大誕生時よりのお付き合いということもあり、どこにもない形の地域と大学の関わり方だと思う。それ

ゆえに難しい面も多い。例えば「我々はどこまで大学に入って良いのか？」など。大学にも独自の考え方と活動があるし、先生方にもそれぞれの思いがある。どちらかの考え方を押し付けるような事はせず、理解しあえる部分から少しずつ関係を広げたい。

Q：「共に歩む会」の今後の抱負は？

A：地域と大学との、しっかりした懸け橋になりたい。とは言え、どんなに立派な活動をして、それで会員が振り回されるような事があっては本末転倒。皆の総意を取りながら、形式にとらわれずに自然体で行きたい。

会見データ：6月20日（月）秋吉整形外科院長診療室にて 編集部：本田・三村

『いずれは美術の集合体を！』

「ギャラリーのぐち」社長 野口 俊一 氏

野口俊一／のぐち しゅんいち

1950年9月5日、直方市新入に生まれる。

福岡大学経済学部を卒業後、「小倉玉屋」に就職。

79年に玉屋を退職し、直方市殿町に「ギャラリーのぐち」を開店。現在に至る。

開店以来順調に業務を拡大、同じ通りに次々と別館を増やし現在9館。「空家の並ぶ裏通り」をアンティーク・陶器・特注家具・美術工芸品 etc.の「MONO物ロード」に生まれ変わらせた。量販店・ディスカウント店の攻勢で苦戦を続ける既存商店街からみれば、その健闘ぶりは絶賛に値する。活躍の秘訣を伺った。

Q：事業拡大の秘訣は？

A：お客様の後押しがあったのが一番。「煽られた」というか、とにかくお客様との関わりの中でこうなった。好きで始めた創業者だから型にはまらない商売ができた。あとは勢い。途中まではいろいろ計算もするが、最後は「とにかく行けるまで行こう」となってしまう。常に新しい目標に挑戦していきたい。

Q：店舗拡大を同じ通りで行ったのは？

A：アンティークという商品の性質上スタッフを分散できなかったのが理由。そのおかげで通り全体が独特の雰囲気を作れるようになった。それに魅かれてか、遠くは宇部や隈本からもお客様がおいでくださる。

Q：お客様を魅き続けるコツは？

A：心がけとして、「お客様との密着度」には気を使っている。「店に買い物に来た消費者」ではなく「家に遊びに来たお客様」として接している。

次に情報とコンセプト。仕入れサイドでは問屋や作家・窯元など三千弱の方々と取引している。ここでお互いに情報交換しながら「ギャラリーのぐち」にふさわしい品揃え、新しい「のぐち」を作る品揃えができるように努力している。

Q：将来の夢は？

A：いずれは「美術の集合体」というか、テーマパークのようなレベルまで持って行きたい。

お客様ともよく話すが直方は住みやすくよいところ。仕事を通して愛する直方に貢献できればこの上ない。

会見データ：8月7日（日）直方市ギャラリーのぐち、本館にて 7期：飯野 編集部：三村

『筑豊—炭坑の町に生きて』

強制連行を考える会会長 大野 節子 さん

大野節子／おおの せつこ

1926年2月28日嘉穂郡碓井町西郷に生まれ旧満州で育つ。浪速高等女学校卒業。戦後、日本に引き揚げ「炭坑の町」桂川町吉隈に住む。85年に「強制連行を考える会」を発足、代表世話人を務め現在に至る。

食生活改善推進会飯塚地区連合会会長・ボロンテ21代表も兼任。

強制連行と食生活改善。大野さんにとってこの2つは炭坑の生活そのもの。筑豊の多くの人が気がつかなかつたり目をつむつたりする中を闘ってこられた。

Q:「強制連行」のテーマに取り組むきっかけは?

A:炭坑がなくなり炭住が壊される中、「炭坑の町」に暮らした者として「何かシンボルを…」と、吉隈に有る「忠魂塔」を残そうと思った。すると『徳黨追慕碑』と書いてある。何だろうと調べてみると、当時の坑内火災で亡くなった朝鮮人労働者の事だと判った。さらに調べる中で、強制連行の事実・労務の実態等の歴史が浮かんできた。祖国から無理やり連れてこられ厳しい職場で働き、被災した後の遺骨さえ放置されている。残念ながら、これも「炭坑の町」の一面。しかし「炭坑の町」の歴史を伝えたい者として、これを無視する事は出来なかった。

小竹でゴルフ場を建設した時、大量の遺骨が出てきた。放置されていた朝鮮人労働者の遺骨だ。まだまだいくらでも出るだろう。筑豊には炭坑が588もあったのだから。最後まで行きつかぬにせよできる限り歴史

を追ってみたい。

Q:食生活改善運動は?

A:炭坑の人は賃金が低く栄養不足から病気も多かった。活動を通じて賃金交渉の資料を作ったり、油・牛乳・卵の摂取をめざす「フライパン運動」をやった。当時それらは貴重品。共同購入を画策したりした。生協の走りかもしれない。

Q:今後はどんな運動を?

A:高齢社会に対応したネットワークを広げている。1年ぐらいしたら「考える会」の事務所の1Fを「託老所」にしたいという構想を持っている。

～インタビューを終えて～

淡々と話される大野さんに比べ、聞く側のほうが興奮。何度「凄い」と言った事だろう。

会見データ:8月25日(木)桂川町住民センターにて 編集部:宮嶋・仁井見

『自分の力で立ち上がれ!』

マルボシ酢株式会社・代表取締役会長 星野 胤高 氏

星野胤高／ほしの たねたか

1934年2月5日、田川郡猪位金村に生まれる。

田川農林高校卒業後、先代・国繁氏の始められた酢製造業に従事。

65年12月、法人化と同時に社長に就任。94年9月、会長に就任、現在に至る。

九州醸造酢協会会長・田川法人会副会長・食品衛生協会専務理事他を務める。

「お酢で健康!」の名作テレビCMでおなじみのマルボシ酢。地域の一業者に過ぎなかった同社を全国的企業まで育て上げた星野会長に、成長の足跡・酢と現代の食生活・筑豊の課題など伺った。

Q: 事業拡大の秘訣は?

A: 味噌や醤油との兼業が多かった業界で、酢の製造に専念したこと。それも合成酢でなく米や穀物で作る醸造酢に絞ったことがあげられる。しかし何より、食生活の変化に伴い、酢の需要が自然と伸びたことが大きい。

Q: 現代の食生活あるいは健康と、酢の関係は?

A: 食物の消化やエネルギー代謝には様々な酸が関わっている(クレーブス理論)。酢はこの代謝を支える有効な酸を多く含み、疲労物質=乳酸の分解促進・感覚細胞への刺激効果、さらには代謝促進に欠かせぬビタミンを保持する働きをするなど極めて有効な食品と言える。食生活の高脂肪化・高カロリー化の傾向、また現代人の健康に取って無視できぬストレスに関してなど、酢の効用がますます重視されてきている。

Q: 企業人として、あるいは一市民として

筑豊の現状をどう思うか?

A: 石炭産業崩壊以後、国による保護は確かに必要だった。しかしそれは金ではなく技術や教育の形で行われるべきだった。未だに国の補助金に依存する体質が残っているのは残念でならない。

倒れた者は自分の手で立ち上がるしかない。汗をかきながら、裸足でまた歩きだすしかない。経済的復興はもちろん大切だが、その為にはまず精神の変革=自助努力・自主独立しうる人作りが必要だ。

ただ、筑豊も石炭の時代より二世帯が過ぎ、少しずつだが良い方向に変わってきているように感じる。時代の流れの中で当然変わらざるを得ないのだが、喜ばしいことだと思う。

会見データ: 10月5日(水) 川崎町星野
会長宅にて 編集部: 原・三村

『古い殻は打ち破れ!』

明治屋産業代表取締役会長・直方商工会議所会頭 谷尾 欽也 氏

谷尾欽也／たにお きんや

1933年11月28日、飯塚市に生まれる。

会社員・仲買人等を経て62年宮田町にて精肉小売業を開業。

67年に本部を直方市に移転。72年4月明治屋産業株式会社設立、代表取締役社長に就任。92年6月、代表取締役会長に就任、現在に至る。

94年7月より直方商工会議所会頭を務める。

毎週末6万人の消費者を集める「びっくり市」で有名な明治屋産業。主業務は全国に百数十店舗を抱える日本有数の精肉小売業。その会長として直方・福岡・東京を週に何度も往復し、更に商工会議所会頭としての職務も務める谷尾氏。超激務の隙間をぬってお話をお伺いした。

Q：事業拡大の秘訣は？

A：事業を始めた頃は高度成長と流通形態の変化で何もしなくても20%増が見込めた時代。その時、状況に甘えず様々な試みや努力をしたのが結果的に実ったのではないかと思う。

Q：「びっくり市」は？

A：本社工場を現在地にうつした際、地域住民の方々からの要望もあり、利益還元の意味も含め開設。米国の「ファーマーズ・マーケット」のイメージで作った。お陰で好評をいただき、今後の事業戦略の上でもよい資料を得ることができた。

Q：明治屋の今後は？

A：流通形態の変化が著しい今日、精肉に限らず鮮魚青果の生鮮業界はいずれも後継者難。企業という業態の元で業界を維持していく責任を感じている。「ビックリ市」で得たノウハウを元に消費者の要望に応えていきたい。

Q：会議所会頭として、地域の商業に対し

ては？

A：今日の激しく厳しい商業環境の変化にいかに対応してゆけるかが問われている。本来もっと余力のあるうちに時代の流れを読んで対策を講じるべきだった。絶頂期こそが次の時代への転換期であり改革の時期であった。古い時代のプライドを捨て殻を打ち破りあくまで消費者本位の視点で商業環境の再構築に死に物狂いで努力しなければならない。この努力を怠ったならば、衰退は明らか。直方には新しい発想で成功を収めている経済人が少なくない。決して不可能なことではない。

Q：筑豊に対する思いは？

A：川筋気質は事をなすには向いている。問題は方向性。地域活性化にしても、「補助を引き出す」ではなく、「自立の手段を構築する」との姿勢が必要だ。

会見データ：11月8日(火)直方商工会議所会頭室にて 7期：野見山・編集部：三村

『沿線住民のマイレールを目指して』

平成筑豊鉄道株式会社代表取締役専務 青柳 榮一 さん

青柳榮一／あおやぎ えいいち

1935年10月1日田川郡伊田町(現田川市)に生まれる。

九州大学法学部を卒業後福岡県庁に入庁。福岡地方労働委員会事務局長など歴任した後、94年3月、退官。同年6月より平成筑豊鉄道株式会社代表取締役専務に就任、現在に至る。

1989年10月1日、旧国鉄の伊田線・糸田線・田川線を引き継いで生まれた第3セクター平成筑豊鉄道。国鉄時代に比べ本数・駅舎とも大幅に増やしグッと便利に。その甲斐あって全国38の第3セクター鉄道の中でもトップの成績を誇る。地域の鉄道「平筑」の実務最高責任者に、住民の「足」役とは?…等のお話を伺った。

Q: 平成筑豊鉄道、非常に好調なようだが?

A: 国鉄時代に比べ停車駅を17駅から28駅に、ダイヤを74便から208便に(1994年現在)増やした結果、利便性が向上し大幅な乗客増につながった。

鉄道の路線には、産業路線・観光路線・生活路線等いくつかのタイプがある。伊田・糸田・田川の三線は明らかな生活路線。直方・田川・行橋の三極を結んだ11市町村にまたがる筑豊の大切な「足」。だからこそ、平成筑豊鉄道として生まれ変わったし、また住民の皆さんに使っていただいていることで当初の目的は果たされたと言える。

Q: 今後の展望は?

A: 沿線地域が衰退しては鉄道自体も成り立たない。今後も利便性・安全性の向上に努め、沿線住民のニーズ＝「住みよい街の便利な足」の役を務める。それと同時に、沿

線の観光資源の開発や、駅舎を利用したコミュニティスペースの創設など、「文化や自然の豊かな街づくり」を手伝うことで地域に貢献していきたい。既に沿線観光「ふれあい列車」(各駅発沿線一周約3時間)を走らせたり、駅舎をコミュニティホール(犀川駅)や草木染めギャラリー(崎山駅)に利用いただいたりしている。

Q: 筑豊に対する想いは?

A: 我々の世代は石炭産業の天国と地獄を見てきた。多くの友人が全国に散っていった。故郷を守るものとして、全国の友人たちが帰ってきやすいように、帰ってきて素晴らしいという地域になるように力を尽くしたい。

会見データ: 12月5日(月) 金田町平成筑豊鉄道本社にて 編集部: 三村

『現実をしっかりと見据えろ!』

朝日新聞筑豊支局支局長 平岡 昇 氏

平岡 昇／ひらおか のぼる

1947年6月24日、長崎県に生まれ、山口県下関市に育つ。

山口大学卒業後、70年4月朝日新聞社に入社。愛知県豊橋支局を皮切りに全国各地に赴任。94年4月より筑豊支局に支局長として就任、現在に至る。

筑豊での出来事に精通し、しかも客観的な立場で報道を続けるジャーナリスト。彼らの目に映る筑豊の姿はどのようなものだろうか。「自分たちのスタンスを見つめ直そう」との意図で今月より始める筑豊総支局長シリーズ。第1回として朝日新聞平岡支局長にお話を伺った。

Q：ジャーナリストとして筑豊にどのような印象を？

A：一言で言うと、歯がゆくてたまらない。

西部本社に赴任してた時に汚職や鉱害事件などの取材で筑豊に日参した。10年ぶりに筑豊に来たが、やはり地方政治の不祥事が目につく。地方政治のレベルが10年たっても上がっていないんじゃないか。地域振興という大きな問題に対しても小さな自治体がそれぞれの縄張りでチマチマとあがいている。石炭六法がもう失効するというのを各自治体はちゃんと認識しているのだろうか。「石炭ショック」からもう20年にもなるのに、いまだに財政状態は最悪。将来の指針も聞こえてこない……。

この20年間に一体何をしてきたのか。このままでは筑豊は立ち直れない。

Q：一住民として筑豊は？

A：非常に住みやすい。人情に厚いし、排他的でないし、人物は多いし……。朝日新聞の九州の支局の中でも非常に人気のある地でもある。前任者たちも「今、どうなってい

る？」と何時までも愛着を持っている。この地で伴侶を見つける記者も多い。以前、夕張炭坑で筑豊出身者にインタビューしたが、彼らの筑豊への望郷の念は非常に強かった。繰り返しになるが、それだけに先に述べた状況が歯がゆくてならない。

Q：筑豊支局長として今後の抱負は？

A：外から見た筑豊のイメージ(必ずしも正しいとは限らないが)を変えるには内から変えねば。その為の報道をネチッコクやってゆく。地方の視点と同時に日本全体の中での筑豊という視点で見つめて行きたい。

会見データ：1月17日(火) 飯塚市朝日新聞筑豊支局にて 編集部：三村

『「議会に新風」が急務』

西日本新聞筑豊総局長 田村 允雄 氏

田村允雄／たむら のぶお

1944年3月5日、山口県萩市に生まれ、父親の職業柄(警察官)山口県で転居を重ねる。北九州大学卒業、67年4月西日本新聞社に入社。佐世保市を振り出しに社社会部・九州・東京間を行き来。この間、労働組合書記長や執行委員長も務める。93年7月北京特派員より筑豊総局長として帰国、現在に至る。

今回は、ブロック紙として、より地域に密着した誌面作りを続ける西日本新聞にお伺いした。

Q: まず筑豊の印象を?

A: 地域おこしの面で言えば「湿った木炭をウチワで一生懸命あおぐが、なかなか着火しない」ようなもどかしさを覚える。100年に渡り「石炭の栄華」が、この地に染み込ませてしまった意識は実に“罪深い”と思う。「なんちかんちいいなんな」「どげんかなるちゃろもん」「ザーッといこう」。場当たり主義、利権漁り、行政と議会の馴れ合い…。

口では自助・自立を唱えながらも、行政や議会の実相は補助金すがりでしかない。だが、住民側が「石炭六法」再延長なしのカウントダウンの中で、「地域おこし」に立ちあがっているのは頼もしい限りだ。

Q: 一住民として筑豊は?

A: 転勤人生だから、どこに行っても「住めば都」だが、知己を得た範囲で言う限り、男女を問わずカラッとした人情が気持ちいい。多くの場合、話がさっと通じるし、本音の談義になるまでに時間がかからない。2本の大河(遠賀川・彦山川)と緑の連山に囲まれたこの地の自然が育んだ民情だろう。

Q: 筑豊にズバリ一言?

A: 誤解を恐れずに言えば筑豊浮揚の最大の

“障害”は、“議会の質の低劣さ”だ。これが行政執行部の力量向上を妨げ、「こげんあります」と住民の自虐的なマイナス志向に押しとどめている。日常の住民運動に加え、選挙を通じて“石炭ボケ議員”大掃除をし、議会に若い世代の“新風”を吹き込むことが急務と考える。

Q: 筑豊総局長としての今後の抱負などを

A: 九州・山口に立脚するブロック紙としての使命は「地域とともに歩み、その自立と発展に尽くす」であり、4つの編集綱領の中でも根幹を成している。

やや大げさに言えば、西日本新聞は地域と「運命共同体」であり、ここが全国紙(中央紙)と違うところだ。筑豊の活力アップのため“縁の下の力持ち”として汗を流したい。

会見データ: 1月21日(土) 飯塚市西日本新聞筑豊総局にて 編集部: 本田

『出発、石炭街道』

毎日新聞筑豊支局支局長 木村 雄峰 氏

木村雄峰／きむら ゆうほう

1949年9月27日、秋田県北秋田郡生まれ。

早稲田大学卒業後、74年4月毎日新聞社入社。西部本社を皮切りに、東京・山口・鹿児島・大分を経て、94年筑豊支局長に就任、現在に至る。

地域に密着しながら、全国紙としての、幅広い視点からの行動をめざす誌面づくりに毎日新聞の木村筑豊支局長にお話をお伺いした。

Q：初めに筑豊の印象を？

A：石炭に関する物が、一目では分からなくなっている。炭鉱施設跡などは殆どなくなっているし。ただ他の地域には、外から見た「筑豊」というイメージや先入観がいまだに残っているように思う。

人間的にはザックバランで付き合いやすいのだが、他に比べて政治的不祥事が多い。住民から離れたところで、執行部と議会が馴れ合ったり、対立したりしているところが多く見受けられる。ごく基本的な「議会は住民の代表」との意識が薄いようだ。

Q：一住民としての筑豊は？

A：気になる点をあげるとすれば、社会資本の整備の遅れ。例えば、下水道の普及率の向上等が急務であろうか。しかし、概して言えば住みやすく、人情も厚い。町内会の集まりや、幼稚園に通っている子供を通じての父母会など地元の人たちと話し合うことが多いが、何の抵抗もなく受け入れてもらえる。

Q：筑豊にズバリ一言？

A：石炭の歴史を見て回る石炭街道＝コールロードの整備を提言したい。今のうちに保存しておかないと消失する。田川の炭住・小竹の慰霊碑・直方二字町の遊郭・折尾の堀川・水巻のオランダ人捕虜の墓、その他各地の資料館などを結び、アウトドア感覚で見て回れるようなシステムを作ってはどうか。歴史を肌で感じることができ、国内だけでなく韓国・北朝鮮・オランダ・中国と、外にも広がりを見せるものになるはず。それには、筑豊と中遠各市町村が連携して取り組む必要がある。

Q：筑豊支局長としての今後の抱負などを

A：筑豊を元気と活力ある住み良い場所にしたい。その為にできることは、おおよそながら、毎日新聞は全力で応援したいと思う。

会見データ：2月25日（土）飯塚市毎日新聞筑豊支局にて 編集部：田中

『サイズと速度に合わせた街を！』

読売新聞筑豊支局支局長 古賀 暁 さん

古賀 暁／こが あきら

1943年6月10日、福岡県福岡市に生まれ、甘木市にて育つ。

西南学院大学卒業後、読売新聞西部本社入社。長崎・大分支局勤務ののち、
経済部・社会部デスクを経て、93年4月から筑豊支局長に就任、現在に至る。

全国紙としてのスタンスと同時に地域と共にある新聞を目指し、「明日の筑豊を考える30人委員会」の事務局長を務めるなど筑豊の地域づくりに浅からぬ関わりを持つ読売新聞筑豊支局。古賀支局長自身、6・7・8期の筑豊ゼミ生でもある。

Q：筑豊の印象は？

A：都会に比べ時間の流れが人間の速度に似ている。大袈裟に言えば“人間の生きている喜び”や“味わい”等がごく自然に現れる土地柄だ。実に波長が合う。

しかしながら他の地域から見るとイメージが実に悪い。筑豊発の情報発信に努め、イベント等を利用して、とにかく一度筑豊に来てもらうなど、何らかのイメージ戦略が必要だ。

Q：ジャーナリストとして今の筑豊に感じることは？

A：まず議員資質の低さ。利権がらみの感覚ばかり強く、しかも「悪いことだ」という認識がない。いま一つは小さな自治体が割拠していること。隣同士の町がそれぞれ似た様な施設を造る等、弊害の方が目につく。いずれも国からの巨大な補助金に関係しているが石炭六法失効後は、もうこれほど大規模・長期にわたる財政投融资は期待できない。

町村合併や議会改革など「地方自治体の

リストラ」が最も必要な地域が筑豊かも知れない。拡大再生産・高度経済成長の夢を追うまちづくりではダメだ。筑豊の持つ資質と条件を踏まえ、自分たちのサイズと速度に合ったまちづくりをめざせれば・・・と思う。

Q：筑豊支局長として今後の抱負など

A：筑豊はいろんな意味で新聞に対する信頼度も高く、反応も早くて強い。当支局に関して言えば、まさに千客万来、これほど読者と距離が近い支局はない。それだけに、全国紙としての視点と同時に「この地と共にある」との姿勢を貫きたい。きめ細かく“普通の人動き”に密着し、筑豊50万人の名を一度は新聞で（もちろん良いことで）取り上げたい。

会見データ：4月11日（火）飯塚市読売新聞筑豊支局にて 編集部：三村

『馬見の風に吹かれにおいで』

冒険家・「百姓天国」主宰 青木 宣人 氏

青木 宣人／あおき せんじん

1940年熊本県菊池郡生まれ。稲築町在住。

国内はもとより世界五大陸の秘境を冒険し、アウトドアスポーツの第一人者として西日本アウトドア協会代表、他にも全日本ムラおこし仕掛け人会議委員などを歴任する。現在は、国連環境計画協会日本支部の事業企画委員を務める。

国連機関の委員として人間と環境の在り方について考察を続けつつ、自身も平成6年、嘉穂町宮小路にアウトドアスポーツ農園「百姓(ひやくしょう)天国」を開設。半定住型の自然生活を営んでいる。

Q：なぜ嘉穂町なのか？

A：具体的に言うと難しいが、この町の自然と人が私にとってフィットしているように思えたからだ。

Q：住んでみた感想は？

A：季節の変化が素晴らしい。いずれここに居を移し永住したいと思っている。

Q：「百姓天国」の創設の意味は？

A：現代人には自然に親しみ、農業生産をおこなう場所・環境が必要だ。いま日本でアウトドアと云えば欧米スタイルが主流。しかし日本のアウトドアライフの原点は「百姓」、特に中山間地農業に在ると考える。その観点から最適な環境として、嘉穂町を日本のアウトドアライフの発信地にしたいと思ったからだ。

Q：「百姓」農業にこだわるわけは？

A：「百姓」は素晴らしい職業であると同時に、エキサイティングなスポーツ。農業は現在人にとって、教育・ヘルスケア・スポーツ・レジャーの機会を創り出すものだと考えている。

Q：百姓の百が白になっているのはなぜか？

A：私は素人の百姓だから「百姓」。百姓と名乗るにはおこがましいから。

Q：筑豊について感じることは？

A：悪い意味で「筑豊」というイメージにとらわれている。もっと自分の故郷に自信を持って良いのでは。いま住む人たちが、自分の良い所に気付き自信を持って後世に、子供たちに、残して伝えていく努力をすべきだ。

Q：ちなみに「百姓天国」にはいつもいるんですか？

A：夜間は自宅。週3日は福岡の事務所。それ以外はここにいます。いつでも訪ねてください。

会見データ：5月8日(月) 嘉穂町宮小路「百姓天国」にて II期：石本・編集部：立林

『筑豊もボンヤリと明るくなってきたカナ?』

近畿大学九州工学部 桑原 三郎 教授

桑原三郎／くわはら さぶろう

1925年(1926年?)10月20日、鹿児島県曾於郡有明朝に生まれる。

49年3月、鹿児島工業専門学校(現鹿児島大学工学部)卒業。66年、近畿大学九州工学部の新設にともない飯塚へ。現在に至る。

95年より近畿大学・筑豊ゼミ担当委員会の委員長に。

筑豊ゼミ創立以来、ずっと我々にお付き合い頂いている桑原先生。今年度より筑豊ゼミ担当委員会の委員長をお勤め頂く。筑豊ゼミの今後や近畿大学との関係について伺った。

Q：桑原先生にとって筑豊ゼミとは？

A：地域における様々な情報の公開・交換・交流の場としては筑豊ゼミほどの存在は考えられない。そして今の筑豊にはこれが何より必要なこと。まだまだ未整理な部分もあるが、8年間に渡る実績と活動の灯を消してはならない。

Q：近畿大学と筑豊ゼミの関係は？

A：様々な考え方があるが、基本的には相互協力しあえるパートナーだと思う。近畿大学にとって地域に開いた一番大きな窓。筑豊ゼミの名の元に行われる活動はそのまま近畿大学の存在アピールにもつながっている。

また、ゼミ担当委員以外にも筑豊ゼミと関わりたいとおっしゃる先生方は大勢おられる。活動時間など物理的な条件等についてはいろいろ知恵を絞る必要があるが、相互交流の方法はまだ多く残っている。

Q：筑豊に対する想いは？

A：きわめてユニークな歴史と風土をもった地域。その為、個性豊かな魅力的な方が多い。私自身ここを永住の地とした。

Q：今後の筑豊ゼミは？

A：ゼミも将来的な目標としていろいろなビジョンを持っていると思うが、まとまった研究体制というものはなかなか出来ない。ネットワーク機能の維持と発展が第一だと思う。ゼミが発足した1988年当時は筑豊にはまだかなり重苦しい悲愴感が漂っていた。今はボンヤリながらも明りが見えてきたような気がする。これもゼミ8年間のネットワークの成果じゃないかな？

～インタビューを終えて～

ゼミ以外にも研究の事など様々なお話を伺った。別の機会にご紹介したい。

会見データ：6月6日(火) 飯塚市近畿大学桑原研究室にて 編集部：三村

『民族として 我々は侵略の共犯者』

ノンフィクション作家・ありらん文庫主宰 林 えいだい 氏

林えいだい／はやし えいだい

1933年12月4日、田川郡香春町生まれ。

《主な著書》「海峡の女たち－関門港沖仲使の社会史」(葦書房)

「闇を掘る女たち」(明石書店) 「望郷－鉦害は消えず」(巫紀書房)

戦後50年。歴史の谷間に埋もれようとしている強制連行の歴史。一大産炭地であった筑豊においてさえ忘れられようとしている炭坑労働者の実態。語り継ぐべき術を持たない社会の底辺の「声なき声」を丹念に取材し、記録し続ける。

Q：強制連行にこだわるわけは？

A：強制連行ではなく、戦争にこだわっている。戦争の紛れもない一断面が強制連行である。戦犯追及を恐れた軍部が都合の悪い記録を処分してしまい、未だ戦争の実態が解明できない。しかし、日本にとってどんなに不都合なことでも事実は事実として歴史の中に位置づける必要がある。過去を置き去りにしたままでは未来はない。強制連行を追い続けるのは、侵略戦争に対する私なりの、日本人としての責任の取り方。

また個人として、父が炭坑から逃げてきた朝鮮人労働者を匿って世話をしていた事、その父が出征兵士に「生命を粗末にするな。必ず生きて才氏の元に帰ってこい」と諭し、「お国(天皇)の為に死んでこい」と言わなかった事で特高に逮捕され、(国家権力に)殺されたも同然の死に方をしたことが原点に有る。

Q：追い続け、記録し続ける中で思うことは？

A：筑豊を荒廃させ、おびただしい数の労働

者を棄民した、資本の論理と国の政策に激しい怒りを覚える。

社会の底辺の人からの方が学ぶことが多い。「ホゴ(生活保護)なんか貰うか。坑夫の誇りが泣く」と、労働の対価以外は拒否する元坑夫もいる。労働に対する誇りや生き様の、生死を超えた素晴らしさは記録し伝えなければと思う。

Q：ありらん文庫を開設した目的は？

A：これまでの取材活動の全てとも言える資料や図書を一般に開放しようと思い、公的施設への寄贈も考えた。が、それでは折角のナマ資料が死んでしまう。考えるより先に行動を起こす性格の私は、カネもないのに、私設で開設した。

アジアへの侵略の事実を真っ直ぐに見つめ、戦争と平和を来た人と一緒に考える場にしたい。

会見データ：6月18日(日) 田川市川宮の「ありらん文庫」にて 8期：井上・編集部：田中

『長期滞在したくなるまちづくりを』

近畿大学九州工学部 新井 潔 教授

新井 潔／あらい きよし

1950年11月27日、東京都文京区生まれ。埼玉大学理学部物理学科卒業後、広島大学物理学科・東京都立大学経済学部・東京工業大学社会工学科を経て、88年より近畿大学九州工学部経営工学科へ。現在へ至る。

95年8月より1年間、ニュージャージー州立ラトガース大学へ客員教授として留学する。

過去、筑豊ゼミでも新井先生の専門研究を何度も活用させて頂いた。特に、ゲーミングシミュレーションの手法を使った「筑豊市長選挙」、SIMPLEの手法を使った「住学協同機構筑豊地域づくりセンター設立シナリオ」の二つは白眉。渡米前の忙しい合間を縫ってお話を伺った。

Q：先生のご専門は？

A：政策形成の研究。それも政策の評価ではなく、そこに至るまでの合意形成・意思決定の研究。例えば都市計画などでも、政策形成の過程が難しく判りにくい。「良い案」といわれるものも、検証してみると「専門家にとって良い案」だったりして、一般の人には見えにくい時代になっている。この判りにくく見えにくい「政策形成に至るまでの合意形成・意思決定の過程」を明快にする科学的な手法を確立したい。

Q：アメリカではどのような研究を？

A：色々あるが、「国際観光旅行」のプロジェクトを組んでいる。

旅行、特に国際的な旅行は異文化との出会いだ。旅行者が外国の都市を訪れてどのような地域理解をするのか？これは突き詰めれば風土や文化といった都市イメージ

にもつながる。観光政策にしても、旅行者にいかにお金を落とさせるかといったマーケティング的なものだけでなく、いかに自然や文化遺産を守るかという政策も重要ではないか。この様に都市作りの一環として「観光」を取り上げてみたい。

Q：筑豊に対して一言

A：誰が来ても「長く居たい」と思われるような地域になって欲しい。それが街づくりの基本ではないか？

筑豊は福岡・北九州の通勤圏にありながら都市圏郊外によく在中世的な街ではない。文化的にも風土的にも、良くも悪くもアクが強い。自然や文化遺産を守りながらも経済的に自立できる街を目指してほしい。

会見データ：7月25日（火）近畿大学新井研究室にて 編集部：三村

『本当はクラリネットが作りたかった』

横笛つくりの名人・笛のアマチュア演奏家 六角 彰 氏

六角 彰／ろっかく あきら

1921年3月12日、田川郡金田町生まれ。直方市頓野在住

13歳のころから笛作りを始める。石炭を混ぜた「石炭の笛」や、広島原爆瓦で作った「広島の笛」、長崎原爆瓦と小倉の土を混ぜて作った「小倉・長崎の笛」などを作成。「宮田国際音楽祭」演奏し話題となる。

自営業（酒店）と、“趣味”とおっしゃる農業の忙しい真っ最中を、無理やり訪問しお話を伺った。

Q：笛作りを始めたきっかけは？

A：子供の頃、町の祭りで笛が使われていたから。本当はクラリネットが作りたかった。でもラジオで音を聴くだけで見たことが無く何度作っても尺八の音しか出なかった。今年初めてクラリネットを手にとってみたが、家に帰って10分で作ることができたよ。(笑)

Q：「宮田国際音楽祭」で演奏することになったきっかけは？

A：ジローという犬がおったんやけど、その犬が笛を吹くと一緒に歌うようになってね。それがテレビに取り上げられ、音楽祭実行委員会会長の船越さんが見たのがきっかけ。最初の3年間はジローもステージで歌っていた。船越さんはそれ以来企画をしていてくれる。

「石炭の笛」「広島の笛」「小倉・長崎の笛」なども船越さんのアイデア。合成樹脂と原爆瓦の破片を混ぜたパイプを船越さんが持ってきて、わしをそれを笛に仕上げただけ。

Q：筑豊に対しての思いなどありますか？

A：考えたことないね。自分のことで精一杯。最近近所に酒の安売り店が開店して、食うていけんようになりよる。(笑)

あえて言うなら飯塚・田川よりも直方は元気がないように思うけど。

Q：これからの活動は？

A：日本中の土(空襲の合った都市や、戦場となったまちの土)を集めて「日本の笛」を作った。この笛を使ったオリジナル曲のCDを作り、それをアメリカに送る企画を船越さんが立てている。その反響によってはアメリカに行って演奏する計画になっているけど……

もう歳やけんね。アメリカは遠いけん、キツイばい。(笑)

会見データ：8月30日(水)直方市頓野の「六角酒店」にて 編集部：和田

『ボクシング以外のイベントでも OK!』

梶原工芸社長・プロボクシングタイトルマッチ住民運動実行委員会 “PASSION” 代表
梶原 健 氏

梶原 健／かじわら たけし

1952年1月29日、田川市大国町生まれ。

福岡で修業した後、画家でもある父の勝さんの看板製作業「梶原工芸」の後継者に。元田川青年会議所理事長。

8月13日に田川市で開催された WBA 世界フェザー級タイトルマッチ。人口5～6万規模の地方都市での世界戦は前代未聞。それを実現させたのが平仲選手の田川に対する愛着と、それに応えた住民の動きだった。

試合を盛り上げようと、田川市郡内の若手経営者等で結成された「プロボクシング世界タイトルマッチ住民運動実行委員会」愛称 “PASSION” 発足のいきさつを伺った。

Q：“PASSION 田川” 発足のきっかけは？

A：JC の野田さんがキーマンなんだが、テレビや新聞で田川が全国に知られる良いチャンスなので、若い人を集めてお祭りのノリで試合を盛り上げ、「田川の若い人間」の元気の良さをアピールしたかった。

それともう一つ大きなネライだったのは、田川の青年層のネットワークを作りたいだったんだ。

Q：ネットワーク作りと言うと？

A：いま田川市郡内の各市町村で、青年会議所・商工会青年部・農協青年部ほか若い人たちがボランティアとして地域の街づくりの中核となって頑張っている。

そんな若者をこの機会に集め、ネットワークを作っておけば、今後各市町村での街づくりイベントなどで助け合い盛り上げ会うことができるんじゃないかと。それが田川、ひいては筑豊が盛り上がっていくことにつながるのではないかと考えた。

Q：今回苦労した点は？

A：最初の話が来たのが5月と期間が短かったこと・予定では100名ほど集めるはずがお盆と重なったこともあって20～30名程度になったこと・資金の問題・動き始めてからの団結力など不満を言えばキリがありませんネ。(笑)

しかし “PASSION 田川” は解散したが、大きなネットワークは出来たと思う。発足のきっかけはボクシングだったけど、ジムやファンクラブとは別組織だし、ボクシング以外のイベントでも必要な場合は協力して盛り上げることができると思う。

会見データ：9月29日（金）、田川市大国町・梶原工芸にて 編集部：和田佳久

『イメージによって人は動くーみなまたのイメージを変えようー』

水俣芦北七浦会

水俣芦北七浦会

水俣市と芦北郡三町の地域おこしグループ12団体(367名)が、住民の手で地域の魅力を引き出し、隣町意識を超え不知火海に開けた一つの地域として、新しいイメージを発信するために、連携した。

今年5月に設立、7月17日に設立総会。活動期間は3年間。

七浦会の事業計画の柱は、初年度ー他地域との交流。次年度ー国内外の視察研修をしながら内部検討。そして、三年目に総集編として会の目的達成のための事業を行うというものである。

県外地域おこしグループとの交流のために筑豊地域づくりセンターを訪れた七浦会の会長＝福田興二氏(水俣市・会社社長)、事務局長＝浦田伸一氏(津奈木町・役場職員)にお話を伺った。

Q: 設立の目的は?

A: 水俣病以来「何をやってもダメ」、外の人も暗いイメージで水俣を捉えている。(浦田)
イメージによって人と物は動く。イメージは一つの信用。良いイメージで名が通ってブランドになると、そこに住んでいること自体が人々の自信になる。それが子供たちの自信にもなる。

行政や企業に頼るのではなく、住民自らの手で地域の魅力を引き出し、自己意識の革新と「みなまた」を全国に発信するために集まった。(福田)

Q: 活動期間を3年と区切ったのは?

A: 元々地域で活動している団体の集まりだから、広域的なこちらの活動が長くなれば、地元の活動が分からなくなるし疎かになる。熱しやすく冷めやすい。機関と明確な目標

が在ると頑張りがきく。(浦田)

Q: 筑豊の感想などを

A: 夕張などに比べると、地域の将来に対しての危機感が薄いように思える。ボディブローと同じでこれくらいと思っている内に、意識ははっきりしているが足腰が動かなくなる。ジワジワは気づかない。危機感がないと人は動かない。自ら行動に移し人を動かす。地域づくりはオセロゲーム。ポイントが変わると周りは全て変わる。(福田)

会見データ: 11月19日(木) 飯塚市鯉田の筑豊地域づくりセンター事務局にて
編集部: 本田京子

『「斬新・大胆な発想の地域づくり」をめざして』

山口のんた塾

山口のんた塾

地域の特性を生かした地域づくりのため、斬新かつ大胆な発想と企画力・行動力の豊かな人材ー地域づくりリーダーの育成を目的として平成3年6月開講。

県内各地からさまざまな人材が塾生として参加し、講義・演習を中心とした県内合同研修、地域づくり先進事例を視察する県外研修、小グループによる自主研修等を行う。山口県主催。

11月25日、山口のんた塾が県外学習で筑豊を訪れ、金田町ふれあい塾で田川地区の地域づくり各グループとの交流会が開かれた。さまざまな事例発表・意見交換が行われた後交流会の後、二次会を兼ねた本音の座談会という形でお話を伺った。

Q:「山口のんた塾」の“のんた”とは?

A:“のんた”は「のう、あんた」が訛って「のんた」になったとか。「私はこう思うが…のう、あんた」「俺はこれがしたいが…のう、あんた」という調子で、何事もプラス思考で共に語り学んでいこうとの意味での命名と聞いた。

Q:今年ののんた塾の特徴は?

A:のんた塾は山口全県下の市町村を対象としているが今年は初めて塾生を一般公募した。その結果かどうか、今年は女性が多い。塾生の公務員比率が、従来半分近くだったのが、3分の1になったというのも特徴か。

Q:筑豊を訪れての感想は?

A:昼間、糸田や飯塚を案内してもらったがこんなことで活性化できるか疑問である。また、イベントの報告を聞いてみても他の地域も似たようなことをしている。“筑豊に来たい”と思うようなイベントではないと思う。これは山口県でも言えることだし、のんた塾にも当てはまることだ。やはり企業誘致

などの産業振興を第一に考えたほうが良いのではないか?

Q:筑豊ゼミの感想は?

A:筑豊ゼミに限らず今日お出で頂いた皆さんには危機感がある。石炭六法の失効という現実が迫っているだけに、一人一人が真剣だと感じた。

会見データ:11月25日(土)金田町ふれあい塾にて 編集部:和田佳久・三村良太

(なお今回、座談会という形での取材だったので、あえて発言者を特定していない。)

山口のんた塾カリキュラム概要

4月	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	地と 域し づて く活 り躍 リ ー ダ ー
塾生募集	塾生募集	開講	県内研修	県内研修	県内研修	県外研修	県外研修	県外研修	地公	域開	内研	
									づシ	くン	修	
									りポ			
			第1回	第2回	第3回	第4回	グループ研修			第5回		

(平成6年度「山口のんた塾」活動記録より)

『チェロの響きが私のことば』

チェロリスト 加治 誠子 氏／かじ さとこ

田川市出身。1989年武蔵野音楽大卒業。91年、オーストリア・ウィーンに留学。コンセル・パトリウム入学。93年、ウィーンより帰国後、東京・福岡を中心にソロ・室内楽で活躍。94年、九州交響楽団との協演など日本各地で様々な演奏活動を展開。現在にいたる。

さる12月6日、添田町オークホールでリサイタルを開き、満場の拍手を浴びた。日本各地での演奏活動の合間を縫って「阪神大震災チャリティーコンサート」や母校(船尾小学校)でのエキジビジョンなど地域での活動も欠かさない。「このところ三日と開けずに本番」との過密スケジュールの合間を縫ってインタビューさせていただいた。

Q: あなたにとって音楽とは?

A: 私そのものかな? 「チェロリスト」以外の加治誠子って自分でもピンとこない。

Q: チェロのどこが楽しい?

A: 楽しいって感覚はあまり無い。レッスンはハードだし、コンサートを終えても満足感より反省が先に立ったり…。あまり他人様に勧められる仕事じゃないよね。

Q: でも止められない?

A: やっぱり好きだから弾いている。ああすれば良かった・こう弾けば良かったって思っても、やっぱりチェロやっているときの自分って幸せ。もう一つ。私はチェロを弾いていたからいろんな人～先生やスタッフ・聴衆～と関わり合うことができた。チェロは私の唯一の表現手段。私はチェロを弾くことしかできないけれど、それで皆とつながって・少しでも心に触れられていると思うと最高に幸せ。

Q: ウィーンで感じたことって?

A: 音楽は生活の必需品って感じ。音楽家に対する社会的ステータスも高いし、音楽教育に対する認識も違うので、一流の音楽家の演奏を学生は気軽に聴いたり習ったりで

きる。街角でも、どこかしら生演奏の音が聞こえてくるし、ちょっとした演奏会なんてそれこそ毎日のように開かれている。とにかく生活の中に音楽があふれている。

Q: あなたにとって田川とは?

A: 基本的に好きな街。生まれ故郷だし、家族もいるし。でもいろんな意味で出会いが少ない。人とも、仕事も、音楽とも。例えばクラシック音楽にしても、食わず嫌いっていうのは誰にでもあるし、出会いが少ないってのはそういう時すごくもったいないと思う。特に育つところを選べない子供たちは。

Q: 東京や福岡に住もうと思わなかった?

A: 確かに東京は便利な街。欲しいものは手に入るし、何か企画を実行に移す時もスタート地点がずっと高い所にある。でも東京でも田川でも人間は同じ。音楽に対する反応とか感動に差がないなら、私は田川を選ぶ。田川で弾きたい。チェロを通して、私も田川の人と一緒に幸せになりたい。

会見データ: 1月8日(月)田川市「CITIES」にて 編集部: 三村良太

『きれいな遠賀川を次の世代に』

清酒「黒田武士」大里酒造株式会社社長 大里 叶 氏／おおさと かのう

「遠賀川に鮭を呼び戻す会」事務局長 九州での鮭の生態や孵化の方法を研究
1975年より嘉穂町議会議員(2期) 筑豊ゼミ I期生

遠賀川に約50年ぶりにサケが発見されたのが1978年。サケを呼び戻そうと「遠賀川に鮭を呼び戻す会」が発足。85年人工孵化に成功し、以後毎年稚魚の放流を続けている。

このたび平成7年度福岡県文化賞(社会部門)の受賞が決まった「呼び戻す会」事務局長の大里叶氏にお話を伺った。」

Q：呼び戻す会を結成したきっかけは？

A：遠賀川で鮭が見つかったことです。千年続く鮭神社の献鮭祭はありましたが、伝説が本当だったとは…。そこで、周囲に聞くと、鮭の話がたくさん出てきました。それなら鮭の上る川に戻そうと思いました。

Q：鮭神社とは？

A：宝亀元年(770年)に建てられ、祭神は神武天皇の先祖ですが、鮭の名前がつくのは全国でここだけです。しかも、海からこんなに離れた所なのに…。境内には「海神の使いの鮭を子供が殺したので、町名主が神社に奉納した」という石柱があり、当時鮭は豊作をもたらし、捕まえるとバチが当たるとされていたようです。

Q：会の活動は？

A：1979年結成後、北海道から受精卵を取り寄せ、試行錯誤の結果不可に成功し、以後毎年3月に稚魚の放流をしています。小学生たちが手伝ってくれますが、“鮭への思いやり”の心が“川を汚したくなくなる”

気持ちに育ってくれればと思います。

Q：鮭は確実に戻っているようですが？

A：はい、建設省では、堰の魚道設置等、産卵の条件整備が進められています。最近その魚道に網を張って、鮭を捕える心ない人がいると聞いて残念です。

Q：地域への気持ちをお聞かせ下さい。

A：この遠賀川流域は古くから開け、四季の変化に富んだ暮らしやすい豊かな土地です。地下に“石炭”があったために、この川を汚したことは地域の恥ですが、仕方の無かったことで、当時はこの筑豊が日本を支えていたのです。確かに、悪いイメージが残りましたが、**私たちは次の世代にきれいな遠賀川を手渡す責任**があります。鮭も帰ってきました。

この地域に住み、子供を生みたいとみんなが思うような地域にしたいですね。

会見データ：1月26日(土)、嘉穂町大里酒造にて 編集部：川原 精二

『知識を行動に移そうー8期ゼミ事務局長に聞くー』

8期ゼミ事務局長 窪山 邦彦 氏／くぼやま くにひこ

1943年生まれ。飯塚市役所で社会教育に長く携わり「祭りボタ山」「嘉飯山熟年の船」などを仕掛ける。現在、情報推進課。I LOVE 遠賀川実行員会事務局長。

ゼミ発起人でもあり、I期ゼミ運営委員、「イベント部会」の部会長も務めている。
趣味：釣り、写真。

自主運営のゼミ。裏方としてゼミを支えてきた運営委員もボランティアである。3月13日の修了式を前に、ようやく「ホッと一息」の窪山邦彦事務局長に感想などを話して頂いた。

▼正直、疲れました

I期ゼミではお互い持っているものを出し合い、学習しよりよいものを作り上げることができた。たくさんの友達ができ、お互いの協力体制もでき、今も続いている。

ゼミでしか得られないものが、回を重ねるごとに無くなり、大学の先生方との触れ合いすら無くなってきていた。

自主運営だから、参加者の意欲や熱意によるのかもしれないが、本当のゼミの面白さを取り戻したいと、「原点に還る」を基本に今期運営してきた。運営委員は裏方。組織を動かすには、責任と基本ルールは必要。仕事が一人に集中するとうまく動かない。役割分担と請けた責任は全うする。そんな、運営の基本ルール整理に時間を取られた。体制づくり等の準備時間が今のゼミにはない。ゼミの面白さを取り戻すのは、参加者の積極性と熱い心しかない。

▼情報化は広域でしかあり得ない

今、情報推進課があるのは飯塚市だけだが、横に繋がらないと筑豊の情報化なんてあり得ない。道がなくても情報は入ってくるし、発信できる。それも世界を相手に直接に。今は、道を作るより情報化を考える

べきだと思う。情報の共有により、例えば山田市の人が飯塚市で住民票をとるなんて事が出来るようになる。

筑豊には、頭脳はあるのに使いきれていない。大学に一番接しているのはゼミ。大学の情報や先生方の知識、施設をどう地域が使いきるか。広域で勉強会などをやりながら行動していきたい。

▼自分一人に止めずに行動を

ゼミで得た知識やネットワークを自分一人に止めず、まわりに、地域に生かして欲しい。次の世代により良い地域を残せるのは、今生きている者にしかできない。

知識があっても、行動を起こさないと何も変わらない。ささやかでも何かやって欲しい。疑問や問題が出てくればまた学べばいい。行動しながら考えるのが良いのでは。

最後に、ゼミに協力して下さった皆様有難うございました。近大の学部長をはじめ先生方や事務の方々には、ご迷惑をおかけ致しました。これからもご支援お願い致します。

会見データ：2月21日（水）近畿大学にて
編集部：本田京子

『いつも笑顔でありたい』

直方商工会議所婦人会初代会長 野見山 ミチ子 氏／のみやま みちこ

画廊喫茶「どんこ庵」代表取締役。筑豊ゼミ I 期生。あすの筑豊を考える 30 人委員会、のおがたまちづくり懇話会でも活躍中。

平成 8 年 3 月 6 日、直方商工会議所で同会議所婦人会の設立総会および祝賀懇親会があった。初代会長になられた野見山ミチ子さんに、これからの活動や抱負について語ってもらった。

Q：会長に就任されるまでの経緯は？

A：昨年 6 月の直方商工会議所議員総会で婦人会の設置が決まり、9 月からの会員の募集期間を経た後、今年 3 月の設立総会に至りました。会長には、総会当日に役員(案)が商工会議所から提出され、その時初めて知りました。自分より立派な方ばかりなのに、なぜ私が？と驚きましたが、今まで勉強したこと成果が出せたら・・・とお引き受けしました。

Q：筑豊ゼミ等さまざまな団体で活動されているようですが？

A：自分たちの住むこの筑豊についてもっと勉強したかったので、あすの筑豊を考える 30 人委員会と筑豊ゼミに参加しました。また、筑豊ゼミ OB や行政の職員と一緒に、のおがたまちづくり懇話会を作り地域の活動をしてきました。

Q：いま特に取り組んでいるのは？

A：平成 13 年に期限が切れる石炭六法について勉強しています。また、尺岳川のホテルについて取り組んでいます。これらは行政への要求だけではダメです。自分たちは

こういうことができるという共存型でなければなりません。

Q：直方のまちづくりについては？

A：福岡・北九州の両百万都市から 1 時間以内の範囲にあります。「ホテルが飛んでいよ」と電話を受けて、1 時間後には目の前にホテルが見えるのです。豊かな自然を大切に残しながら、自然と文化の共生ができれば、交流人口は増えると思います。

Q：今後の婦人会の活動については？

A：具体的にはこれからですが、3 月はじめの西日本新聞に「新パートナーシップ構想」という記事が載っていました。「お互いの良いものを引き出しながら、相手の欠点に触れないでいこう」というものです。考え方は皆それぞれ個人差がありますが、直方が良くなって欲しいという願いは共通です。これさえあれば、きつとうまく行くと思います。一生懸命に頑張り、どんなに苦しくても「いつでも笑顔でありたい」と思います。